

# 外来害虫クビアカツヤカミキリは山の木を加害するか

林業試験場 経営環境部 法眼 利幸

## 〔はじめに〕

外来種クビアカツヤカミキリは主としてバラ科樹木を加害し、日本では‘染井吉野’、枝垂桜といった植栽木、モモ、スモモ、ウメといった果樹の被害が確認されている。日本国内では2011年に埼玉県で発見されて以来、分布地域を拡げており、2019年ついに和歌山県かつらぎ町において被害が確認された。本県の基幹産業である果樹産地を守り、紀伊半島固有のクマノザクラの保全を考えるうえで、山地に自生する樹木を加害するか、それらで繁殖するかを明らかにしておくことが重要である。

## 〔材料と方法〕

山地性バラ科樹種の切枝に接種したクビアカツヤカミキリ幼虫の生存および発育状態から、寄主としての適合性について考察した。

供試したバラ科樹種は表1のとおり。それらの枝は、クマノザクラは田辺市、‘染井吉野’は森林総研樹木園、それ以外の樹種は森林総研多摩森林科学園で採取した。細枝は長さ18cm（平均中央径15mm）に切り揃えた。供試虫は、群馬県で採取したクビアカツヤカミキリ成虫が産んだ卵から得られた孵化幼虫を用いた。7月24日に枝中央部に切り込みを入れ、孵化幼虫1頭を接種し、ポリ袋に入れて25℃で保管した。41日後に樹皮を剥ぎ、接種幼虫の生存確認と生体重を計測した。

## 〔結果と考察〕

- ・各樹種における幼虫生存率は68～96%で、樹種間で差はみられなかった（ $\chi^2$ 検定  $P>0.05$ ）。
- ・各樹種における生存幼虫の生重は、個体によるばらつきが大きかった。樹種間で比較すると、オオヤマザクラとバクチノキではほかの樹種に比べて幼虫生重が大きく、ビワがミヤマザクラより小さかったものの、その他の樹種の間には有意な差は見られなかった（Scheffeの方法  $P>0.05$ ）。
- ・接種幼虫の成長が‘染井吉野’と同等かそれ以上であった、カスミザクラを除くサクラ属樹種とバクチノキは寄主としての適合性があると考えられ、クビアカツヤカミキリは山地に自生する樹種を加害する可能性があると考えられた。
- ・産卵は凸凹の多い根際等の樹皮の割れ目や隙間に行うため（岩田2018）、樹皮の形状によって産卵しやすさが異なると考えられる。また、生立木では抵抗性が強く幼虫死亡率が高いとされ（北島2018、加賀谷2018）、老木や樹勢の衰えた木の被害が多いという報告もある（薛ほか2011、張ほか2000、余・高2006）。昆虫一般における産卵成虫選好性と幼虫発育適合性は別物といわれ（岩田2018）、生立木の抵抗性の強さ等も含めて産卵における選好性を明らかにしていく必要がある。

表1 供試した山地性バラ科樹種の細枝数と平均中央径

属	種	学名	供試 細枝数	中央径(mm)	
				平均値	± SD
アズキナシ	アズキナシ	<i>Aria alnifolia</i> (Siebold & Zucc.) Decne.	23	14.2	± 6.1
	エドヒガン	<i>Cerasus itosakura</i> (Siebolt) Masam. & Suzuki	25	15.3	± 2.6
	ヤマザクラ	<i>Cerasus jamasakura</i> (Siebold ex Koidz.) H.Ohba	25	14.3	± 2.9
サクラ	クマノザクラ	<i>Cerasus kumanoensis</i> T.Katsuki	25	21.9	± 2.5
	カスミザクラ	<i>Cerasus leveilleana</i> (Koehne) H.Ohba	25	14.5	± 4.2
	ミヤマザクラ	<i>Cerasus maximowiczii</i> (Rupr.) Kom.	25	13.2	± 5.7
	オオヤマザクラ	<i>Cerasus sargentii</i> (Rehder) H.Ohba	25	13.9	± 7.3
	オオシマザクラ	<i>Cerasus speciosa</i> (Koidz.) H.Ohba	25	15.6	± 6.2
	‘染井吉野’	<i>Cerasus × yedoensis</i> (Matsum.) Masam. & Suzuki ‘Somei-yoshin	28	15.2	± 4.5
	ビワ	ビワ	<i>Eriobotrya japonica</i> (Thunb.) Lindl.	26	16.8
バクチノキ	リンボク	<i>Laurocerasus spinulosa</i> (Siebold & Zucc.) C.K.Schneid.	25	11.2	± 5.7
	バクチノキ	<i>Laurocerasus zippeliana</i> (Miq.) Browicz	23	17.3	± 3.7
リンゴ	オオウラジロノキ	<i>Malus tschonoskii</i> (Maxim.) C.K.Schneid.	23	10.6	± 4.5
ウワミズザクラ	イヌザクラ	<i>Padus buergeriana</i> (Miq.) T.T.Yü & T.C.Ku	20	17.0	± 7.4
	ウワミズザクラ	<i>Padus grayana</i> (Maxim.) C.K.Schneid.	22	13.6	± 5.2
カナメモチ	オオカナメモチ	<i>Photinia serratifolia</i> (Desf.) Kalkman	25	13.8	± 3.8

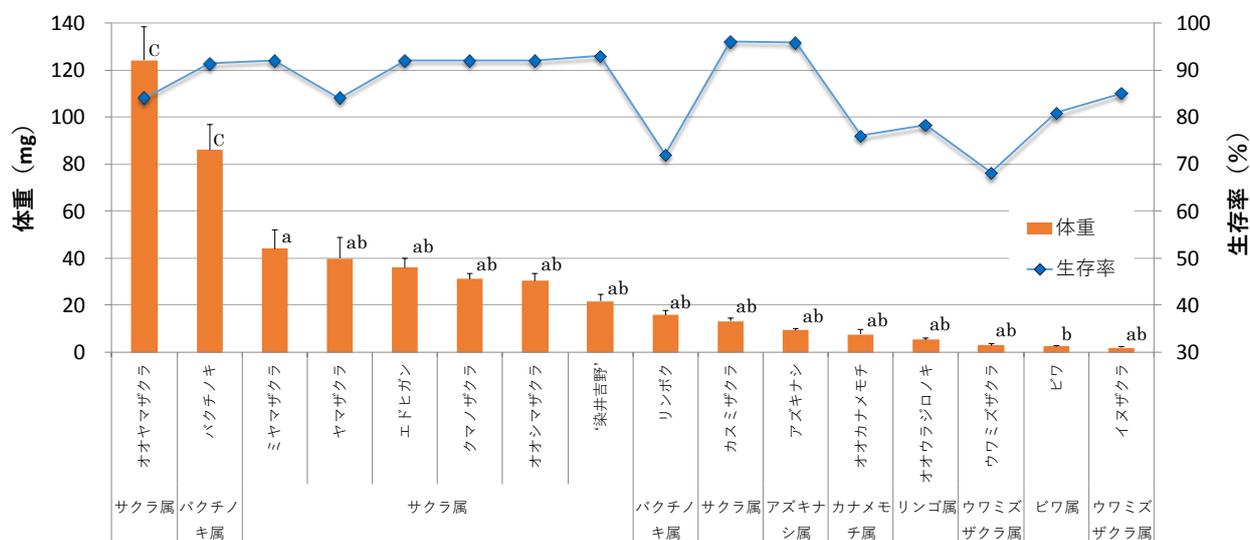


図1 バラ科各樹種の細枝に接種したクビアカツヤカミキリ孵化幼虫の接種41日後の体重(生体重)と生存率

※ 体重の棒グラフ上の棒線は標準誤差を示し、アルファベットが同じ樹種は Scheffe の方法 (p<0.05) で有意差がみられなかったものを示す。

※ 生存率は Holm の方法で補正した  $\chi^2$  検定 (p<0.05) で樹種間の有意差がみられなかった。

本研究は森林総合研究所の北島博氏、同所多摩森林科学園の勝木俊雄氏と共同で実施したもので、森林総合研究所交付金プロジェクト(課題番号 201702)、農研機構生研支援センターイノベーション創出強化研究推進事業「サクラ・モモ・ウメ等バラ科樹木を加害する外来種クビアカツヤカミキリの防除法の開発(30023C)」、および和歌山県農林水産基礎研究「森林・特用林産物の病害虫防除に関する基礎研究」の研究成果である。